序

1980年代にオッセオインテグレーションという概念とともに画期的な治療法として紹介されたインプラントは、当初無歯顎症例に対して適応され、総義歯に悩まされる患者のQOLを大きく向上させた治療法であった。その後、治療技術の進歩により部分欠損症例や審美的要求度の高い部位に対しても広く応用され、欠損補綴の第一選択と言われるまでになった。その反面、日常臨床においてはトラブルに見舞われたインプラントも目にするようになり、関連学会においてもインプラント周囲の問題がテーマとして大きく取り上げられるようになった。このような状況を鑑み、日本臨床歯周病学会では2013年に「歯周病患者におけるインプラント治療のガイドライン」（クインテッセンス出版社）を刊行し、インプラント治療における歯周病学的観点の重要性を示した。

その後も、インプラント治療を取り巻く環境は大きく変わり、新たな生物学的事象が明らかになったり、日本の人口の超高齢化などの社会現象の影響を受けている。このようにインプラントへの関心が高まる中、社会的にもインプラント治療に対して警鐘を鳴らす報道や、歯科医の倫理を問われるような記事も目にする機会も多くなった。そして、2018年にAAPとEFPが共通のコンセンサスとして発表した歯周病の新分類においては、インプラント周囲の問題が明記され、その治療法について多くの新たな知見が発表された。

このタイミングで本学会が、本書を通しあらためて歯周病に罹患している患者に対するインプラント治療における注意点や、その後のメインテナンスにおける現在の知見、インプラント周囲炎の最新情報やその対処法などをまとめることには、大きな意義があると感じている。インプラント治療は、今後も術式や材料などが進化していくものと思われるが、同時に未知の事象や変化に遭遇することもあるであろう。そのような事象に真摯に向き合い、より安全なインプラント治療を患者に提供したいと望む臨床家にとって、本書がその一助になれば幸いである。

2019年9月

日本臨床歯周病学会
浦野　智
武田朋子
高井康博